

コラム

DDAが開く可能性 - 二つの世界を生きる -

ふじた まちる
藤田 護

(環境情報学部専任講師)

多言語教育 (アイヌ語とスペイン語) の教員であり、ラテンアメリカ研究や人類学・口承文学研究を講義と研究会で担当する私にとって、試読をしたうえで必要な電子ブックをリクエストできるDDAの仕組みは授業でとても役に立っている。物理的にメディアセンターに赴かなくてもアクセスでき、そして、教科書や輪読文献については同時に複数アクセスを可能にもらえるので、学生たちがアクセスしながら (または事前にダウンロードをしたうえで) 授業のその場で使用することが可能だ。私の出身のイギリスの大学院では、基幹科目の授業の教科書は何十冊と配架されて短時間あるいは一週間の持ち出しのみ可能という仕組みがあり、なぜ日本の大学図書館にはこのような仕組みがないのか常々不思議に思っていたが、この同時複数アクセスの仕組みは、よりよい形で同じ状態を実現してくれる。研究の先端を概観するハンドブックのような複数の分厚い書物に、

授業の場から即時にアクセスできるのも有り難い。物理的な空間の余裕がメディアセンターにも、そして個人研究室にもなくなっていく中で、電子ブックは配架スペースの節約に大いに役立つのだろう。

ただし、教員の私たちだけでなく学生たちも、まだまだ紙の書籍の方が扱いやすく、読みやすいと思っているようだ。そして、私たちは日本国内に数冊 (場合によっては一冊) しかない、しかし当該分野の研究者や若手大学院生に確実に役に立つ外国の研究書を、執念深く揃え、図書館間の貸し出しを通じて、大学の枠を超え大切にやり取りをしてきた。電子ブックに他の図書館からアクセスできるようになる日は、いつ来るだろうか。紙の本の世界で長い時間と努力をかけて培われ、体制として整備されてきたことの幾つかは、電子ブックの世界ではまだ可能ではなさそうだ。紙の本と電子ブックの狭間で、両方の世界を、私たちは生き続けている。